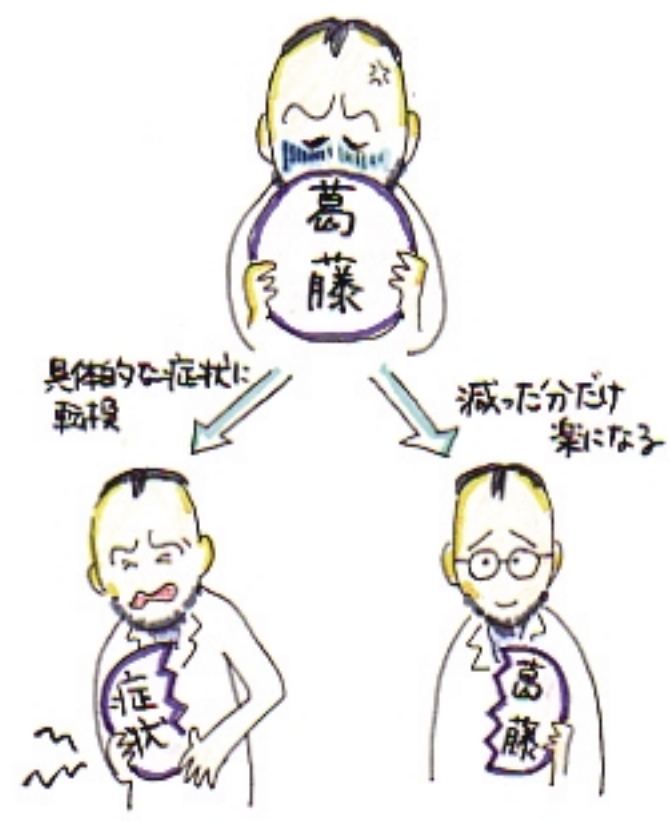


# 病気になる意味

福島淳 イラスト・福島マルゲリータ

一次的疾病利得とは...



いだらう。教育そのものがこのままではいいの、か、という問題提起の発端にもなる。病気であることに対して、社会はそう接すべきなのか。さらには、「病気であるのも、その人のあり方のひとつ」という風に、見なければならなくなってくるかもしれない。

病気が社会を慌てさせるだけでなく、家族や周りの人々を不安定にさせる。そこで、病気になることにより、当事者が得る利益と、病気がもたらしたために家族から引き離される(入院、施設への入所)という現実を、引き受けざるを得なくなる場合もあるわけだ。

ここでフロイトの神経症理論に注目してみよう。それは、「病気が満足をもたらすゆえに、患者は発病し病気を存続させる」とする見解と同じ、と言っても過言ではない。つまり、神経症(いわゆるノイローゼ)になる過程において、症状を出す故にその人の内面の緊張は減少する、という理論である。

患者が意識的には「治りたい」という願望を持っているにも関わらず、治療に対して抵抗を示すことがある。それは、このような「利得」があるからだ。フロイトは、疾病利得を一次的、二次的と区別して考えた。

一次的疾病利得は、症状決定そのものに関わっていると考えた。すなわち、症状があればそのおかげで精神的な緊張を払わずに済む、という点だ。症状はそれほど苦痛であっても、場合によってはそ

れ以上に苦しい葛藤を避けさせてくれる。これがいわゆる「疾病への逃避」の防衛機軸の仕組みだ。

例えば、「夫に虐げられた」妻は、神経症のおかげで、夫からこれまでになく優しくと親切を手に入れることができ、同時に虐待の根みを晴らすことができる。これは次に述べる二次的利得とも関連しているかもしれない。

フロイトは、二次的利得を説明するのに、事故による身体障害者の例を持ち出している。障害者に支払われる「お金」が、「再適応」に対する強い障壁となっているとみたのだ。

彼の説明を引用してみよう。「その人から不具合を除去すると、それは彼から生活手段を奪ってしまうことになり、彼は以前の仕事をまた始める能力があるかどうかという問題に直面してしまっている」。つまり、一次的利得は、心の苦しみの一部が具体的な症状に転換されたもの、と考えて欲しい。転換された分だけ苦しみは減るのである。

二次的利得では、病気になることで「ちやほやされ」、「学校を休んでいいよ」と言われたり仕事量が減ったりするといった利得があるわけだ。このように、病気になることには意味がありうるのだ。もちろん、インフルエンザにかかるのに意味はない。でも、ウイルスに感染する原因はある。

いや、それとも、地球の歴史という大きな流れの中では、伝染病にも疾病利得とは別の「意味」があるのかもしれない。

「頭が痛い」、「お腹が痛い」、「熱がある」などと言って、子供が学校に行きたがらない時、理由はおおむね「種類考えられ。本当に具合が悪い時、学校に行っても楽しくない」程度から、「いじめにあっている」や「登校拒否」といった深刻な事情がある時である。後者の場合、「病気」になる意味には、学校に行きたくない」という明白な意志が読み取れる。フロイトは、「病気への意志」が人間にはあるとみた。「この例では、あるところ(学校)からの逃避」と、周りへの腹立ち、腹いせ」という意味合いがあると思われる。また、「休養を必要とする状態になっている」場合もあるだろう。

完全にアルツール依存症といわれる状態になると話は別になってしまっているのだが、ちょっとした憂さを晴らしに酒を飲み、それが肝臓に悪いことが解っていても続けていくといった自虐的、慢性自殺的な行為も、非常に意志の明確な病気といえるだろう。次に、病気になることのプラス面を考えてみよう。メンタルな病気を抱えている人が適度に、身体疾患にかかると、全体的なエネルギーが低下して、例えば不安を感じるといった面でも感じ方が低下することがあるようだ。周りとの関わり方も少し退行気味となり、治療者との壁が脆くなり、治療が上手に進むようになりたりすることがある。体の病気として扱われることで、少し安心することもある。体の病気なら、例えば「なぜ熱が出たのか?」という程度ですみ、いつものメンタルな問題を扱っている時ほど心理的原因を追及される心配もない。

